

# オロツコ族に就いて

東大理科  
大學講師

鳥居龍藏

私は之から「オロツコ族に就いて」と云ふ題でお話し申し上げやうと思ひます。御承知の如く日本の新たに出来た殖民地にはいろ／＼な民族を有つて居りまして、樺太なども其一つであります。樺太には、人種學上調べますと先づ三通りの民族がある。南に居るのはアイヌ (Ainu) です。是れは北海道及千島に居ると同じ様なアイヌであります。北の方にはギリヤークと (Gilyak) と云ふのが居る。ギリヤークはアムール河口を中心として樺太の北方に分布して居るのであります。西伯利亞の大陸に足を掛けて居る。アイヌも然うでありまして、樺太の南方に居ると共に北海道や千島に居るが爲めに、亦北海道に足を掛けて居る。其故にアイヌと云ふものは、つまり樺太の南端能登呂岬から宗谷岬までの間殆ど海峡を成して居らぬ、人種學上で言へば繼がつて居る。又ギリヤークも人種學上で言へば間宮海峡と云ふものが繼がつて了ふ譯になる。それから今日私がお話をするオロツコ (Oroko) です。オロツコと云ふのは何う云ふ處に分布して居るかと申しますと、主として樺太の中央部と東海岸に分布して居るのであります。さうしてオロツコは日本の領地に居る方が多いのであります。露領樺太に居る方は最も少

い。アイヌは悉く日本領に居る。ギリヤークは寧ろ露領の方が本場で、日本の領地には樺太の北の方に端ッぽが現れて居ると言つて宜い位であります。アイヌ及ギリヤークは人種學上で言へば餘程系統の分らない處の民族でありまして、有名なるシュレンク氏 (L. V. Schrenck) は其著 (Reisen und Forschungen) に於いてこれに古亞細亞住民と云ふ名をつけた。彼等の言語が他のウラルアルタイ系の言語と聊か違つて居る。それで古亞細亞住民といふ一種の名をつけたのであります。さうして彼等の風俗習慣は亞細亞に於いて餘程古いものである。東亞細亞に最も古く居つた民族であつたのでありませう。然るにオロツコと云ふのは是れはツングース (Tungus) といふ民族の系統に屬する。即ち肅慎であるとか或は靺鞨であるとか女真であるとか云ふのは之であります。是れは從來注意しさうなものであつたが、歴史家の方で一向注意せられない。そこで大體オロツコの事を述べて最後に日本と肅慎との比較をしたいと思ひます。

オロツコと云ふのは、唯今申した通り露領樺太よりも我が日本領に居る方が多いのであります。彼等の現今の居住地は何處が中心であるかといふと、幌内川ポロナイの流域が其中心であります。幌内川の東タニイに多來加湖と云ふ湖があつて、其湖の北に居る。尙ほ一つは日本領に接した露領の方ツイミ川の東の方に少しばかり居る。是れ丈が現今樺太に於けるオロツコの地理學的分布であります。彼等の南にアイヌが居る。アイヌの分布の一番北は多來加湖の處です。間宮林藏氏或は松浦武四郎氏などがタライカ族と云ふやう

なことを書いて居るのは即ち是れであつて、全くアイヌであります。さうですからオロツコは南ではアイヌと接觸して居つて、北の方ではギリヤークと接觸して居る。丁度中間に居るのであります。間宮氏の『北蝦夷圖説』に斯う云ふことがあります。『東海岸シイタライカより奥地にオロツコと稱する異俗の夷あり、其人物大に蝦夷島に異にして其言語も亦ひとしからず』と書いてある。『北蝦夷圖説』は今日外國ではオーソリチーの本となつて居ります。

現今幌内川の流域及多來加湖の北にある彼等の村落は十ばかりであります。其村落の名はキウリ、ノコル、ムイカ、ジムタキ、シヨドイ、ワラバイ、タランコタンなどであります。戸數は何程あるかと云ふと、總てのオロツコで八十一戸しかない。其の中ムイカは大きな村で十九戸、シヨドイが十七戸、キウリが十四戸、其の他は二戸、三戸位に過ぎない。さうして現今樺太廳の調では總人口が六百七人許りであります。それから松浦武四郎氏の書いたもので『北蝦夷餘志』と云ふ本がある。安政三年（一八五六年）即ち今から五十六年前に出來た本ですが、其本に依るとニツイと云ふ處で初めてオロツコに出會つて居ります。ニツイと云ふ處は何處かと云ふと、之は今日樺太廳で新間（ニトイ）と書いて居る所で敷香と云ふ處から七八里許り南の邊まで行つた様であります。『現今では其處では見えない。それから近頃出版せられたマックスフウケン (Max Funke) 氏の Die Insel Sachalin に依りますと、樺太全島でオロツコの全人口が八百人と書いてあります。さうすると日本領の六百七人と云ふのは餘程オロツコが

多いと云ふことが分るのであります。次に有名なるツングハツカノフ (S. Palanow) 氏の書かれた  
Versuch einer Geographie und Statistik, 1905 によりますと是れはブタベストで出版した本であります  
が、餘程詳しくツングースの事が書いてあります。此本によりますと、オロツコの人口が七百四十九  
人として、其中で男が三百九十五人、女が三百五十四人、即ち男百人は對して女九十人の割合であると  
書いてあります。さうするとマックスフンケ氏の書いた數と大差はない。さうして日本の一昨年の調  
は六百七人許りになつて居る。是れが現今樺太に於ける全人口であります。

次にオロツコの體質は何う云ふ風であるかと云ふと、頭の形が何うであるとか身長が何うと云ふ様な  
ことは詳しく述べると餘り専門になりますから申上げませぬが、要之、頭の形は他のツングースと同じ  
様に廣い。それから身長は小さい。顔の形は扁平であつて、眼は細く、頭髮は眞直で黒い。皮膚の色は  
黄色である。口は大きい。鼻は扁平である。體もアイヌやギリヤークに比すると小さい。要するにツング  
ース族の體質を具備して居ります。それから言語は何うであるかと云ふと、是れは明にウラルアルタ  
イの語系でありまして、即ち動詞が下に來るテニヲハが附加せらるゝ——滿洲語、蒙古語、土耳其語な  
どと同じ言語であります。殊にツングース語と云ふことは明かであります。私が滿洲語の單語を以て試  
みに話して見るに大概似て居る。ツングースでも滿洲語やゴルド語に近いと云ふことが餘程分るのであ  
りまして、滿洲人の古い有様などを見るにはオロツコは最も面白いのであります。殊に現今沿海州の海

岸に居ります *Olein* (一名 *Mangum*) と餘程似て居る。であるから此等は餘程關係ある民族と云ふことが考へられるのであります。

それから彼等の種族の名稱であります。通例 *Oroko* といふ言葉で呼んで居りますが、露西亞の役人などは *Orochon* といふ言葉を以て云つて居ります。併し *Orochon* と云ふのは露西亞人が言ふので沿海州の方にも同じ名の方がありますから、是れは紛らはしいのです。たゞ口癖に斯う云ふ名前になつたのであります。間宮氏、松浦氏其外樺太に於ける我が日本のオーソリチーを初として外國の有名な學者の論文などは *Orocco* と書いてある。この *Oroko* と云ふ言葉は「馴鹿を持つて居る者」と云ふことに解釋するのであります。私が實際調べて見ますと、どうも然う云ふことは見當らぬのであります。オロッコと云ふのは他の者が彼等に對つて云つて居る名稱であつて、自分では決してオロッコと云ふて居らぬ。是れは餘程注意すべきことであります。實際自分では何う云つて居るかと思ふと *Witta* と云ふ言葉を以て自分で呼んで居る。是れに就いて一二の學者を申しますと、ポリヤコフ (*Polyakov*) 氏の書きましたものに従ひますと、是れは多分ナイーミチのオロッコで聞いたのであらうと思ひますが、氏は *Dilscha* と聞いたと云ふのであります。ナイーミチの方ではウルチャイと云つて居ると云ふのであります。さうすると樺太の對岸に居る處の *Olein* と云ふのと同じ發音になる。此等は餘程注意すべきことであらうと思ひます。この *L* 音が極めてひくい音とすれば幌内河方面の *Witta* と同じ音になります。アイヌは彼

等を何う云つて居るかといふと、オロツコ (Oroko) と云つて居る。多分オロツコと云ふのはアイヌの言葉でありませう。それから其附近に居るギリヤークは何う云つて居るかと云ふと、一體ギリヤークの發音は餘程むづかしいのでありますが、オヒングス (Ohinguan) と云ふ名稱を以て呼んで居ります。大體斯う云ふ風になつて居ります。然らばオロツコと云ふのは、どうも「馴鹿を飼つて居る人」と云ふ意味にならないのであります。それで能く調べて見ましたが、馴鹿のことをウラー (Ura) と云ひ、飼ふことをオコツツリー (Okoturi) と云ふのでありますから、ウラー・オコツツリーと云ふと「馴鹿を飼ふ」と云ふ意味になる。強ひて言へば「ウラー・オコツツリー」と云ふ言葉を當筈めなければならぬ様になる。オコツツリーと云ふ言葉を名詞にして「ウラー何」と云ふならばさう云ふ風に聞こへますが、是れではさう云ふ風に聞こへませぬ。是れは御參考までに申して置きます。

それから彼等の口碑に従ひますと、オロツコは昔から幌内川の流域に住んで居る、ギリヤークは元は幌内川の邊に居らなかつた、北方から下つて來たといふことを云つて居ります。然うであるから、ギリヤークは元は幌内川に居らないで北の方から段々南下して來たものと見える。それからオロツコの口碑に依るとアイヌと戦争をした話は大變多いが、ギリヤークと戦争をしたといふ話はない。此等を見てもギリヤークとオロツコとは接觸交通が昔は少なかつたと云ふことが證せられるのであります。又多來加 (オライカ) のアイヌと幌内川のオロツコの間盛に戦争があつたと云ふ傳説があります。之れを以て見ても分らう

と思ふのであります。又彼等は唯今申しました如く明にツングース民族でありまして、殊にアムールの下流に居るところのゴルデイー (Gorli) とか今申したオルチ (Orchi) とかいふ民族と種々の關係があることを證據立てられる。であるからオロツコはアムールの方面から渡つて來たものでありませう。

御承知の如く間宮海峽といふのは餘程淺瀬になつて居る處があります。さうして冬になると全く結氷して丁ふ。結氷すれば大陸の方と樺太島との間に橋が架けられた様なもので、いろ／＼な野獸が氷の上を往來する。犬に橇を曳かして大陸の方に參ることが出来る。オロツコなどは馴鹿に橇を曳かして行く。であるから間宮海峽と云ふものは人間の交通上に對しては少しも境界になつて居ないのであります。動物學上で調べて見ても、アムール方面に居る動物が樺太に居るものと餘程能く似て居る。オロツコなども矢張り馴鹿を家畜として居る民族である。馴鹿に連れられて樺太に移つて來たものであらうといふことは種々な點から考へられる。大陸にも矢張り彼等と同じに馴鹿を率ゐて居る處の種族が居る、此等を見ても分ります。一番幅の狭い處では三哩位しかない。此等を以て考へても分ります。間宮氏の『東韃紀行』などの中にも書いてあります。樺太が島であると云ふことは間宮氏に依つて發見されて歐羅巴人は知つたのでありますけれども、支那の方では餘程早くから分つて居つた。半島ではなくして島であると云ふことは能く分つて居つたのであります。歐羅巴の學者が知らなかつたと云ふだけで、支那では既に康熙乾隆などの書物にも樺太が島であると云ふことが盛に書いてあるし、又古い『明史』『元史』『金

史』を見ても書いてある。又唐あたりのものに樺太が島であつたと云ふことは見られるのであります。先づさう云ふ風の状態であります。さうしてオロツコは馴鹿の友達でありまして、彼等の衣食住と云ふものは寧ろ馴鹿が本位になつて居る。彼等の財産も矢張り馴鹿である。馴鹿の數を多く持つて居るのが宜い。現今は絶対に水草を逐ふては居りませぬが、半水草を逐ふて居る所の状態に居るのです。彼等は村落と云ふものがありまして、是れは後に申しますが、永住の村落の風でなくして即ち移住性を有つて居るものです。天幕小屋の極く簡単なものであります。さうして春夏は漁業を致しまして、冬秋になると狩獵に出掛ける。漁業は何う云ふ風にするかといふに、幌内川とか或は多來加湖の周圍で丸木船に乗つてするのです。彼等は川では漁業を致しますが、海に出ると云ふことがありませぬ。海に對する知識は極く少い。漁業は極く簡單でありまして、斯う云ふ長い柄の附いて居る三つ又の魚モリ又を投げるのです。魚へ刺さると魚又の先が抜けてしまつて、之に糸が附いて居るからそれで引寄せられるのです。鮭とか鱒とかが群を成して通る處を窺つて之れを投付ける。五つや六つは忽ち獲れます。實に太古の状態を見るやうであります。さうして彼等は魚を獲て川で漁する時分の食物にもせずし、又其魚を携へて歸つて來て腹の内部を抜去つて乾場で乾して、さうして越年の貯へにすると云ふやうなこともする、尙ほ冬期には貂、狐、馴鹿、熊などの獵に出掛ける。樺太の熊は決して人に害をしない。幌内川の岸などに於ては時熊の足跡がついて居つて、昨夜熊が來たと云ふことが分るさうです。

それから彼等が往來するには丸木船を用ひます。けれども丸木船は近頃はオロツコが造らないでギリヤークが造つて交換して居る。大抵船一つを馴鹿と交換する様な風であります。それから彼等は今では狩獵に鐵砲を用ひますけれども、昔は弓矢を用ひて居つたのです。それから熊を獲るには鎗を用ひた。鎗は山且即ちアムールの方から來たので、今でも遣つて居ります。それから家畜はウラ<sup>Ura</sup>(馴鹿)が主になつて居ります。オロツコの方では家畜にして居る馴鹿をウラと云ひ、家畜にして居らぬ野生のものを<sup>Umi</sup>と云つて居る。ギリヤークの家畜は元は犬が主であつたのでありますが、近頃は馴鹿を用ひる様になりました。是れはオロツコの三十四五歳位の男に聞くと、自分の子供の時にはさう云ふ話がかつたと言ふから、三十年以來の變化でありませう。であるからして、ギリヤークには野生の馴鹿も家畜の馴鹿も皆同じ言葉を以て呼んで居りますが、オロツコは言別けて居ります。さうして彼等は馴鹿を用ひることが盛でありまして、財産は殆ど馴鹿であります。

彼等が馴鹿を飼つて居る有様は何うかと云ふと、夏になると蚊が多いから海岸の方に放し飼にして置いて秋冬になれば連れて來る。家の所で馴鹿の蚊を追ふ時は馴鹿苔に火をつけ其烟で追います。馴鹿の肉と云ふものは昔は食べなかつた。是れは松浦氏の『北蝦夷餘志』にも書いてありますが、其記載によると、唯今申した新間<sup>ニイトイ</sup>と云ふ處で初めてオロツコに會つた時分に。或アイヌの酋長の家に泊つて、御馳走として馴鹿を一頭出して呉れた。其時に、ギリヤークは馴鹿を食べたけれどもオロツコは食べなかつ

た、何故食べなかつたと云ふことを聞くと、家畜として用ひて居る爲めに食ふことをせぬと言つたと云ふことが書いてあります。此等を見ても馴鹿を尊んで居ると云ふことが分るのであります。今日は肉を食へますが、昔は乳を取るのが主であつたらしい。馴鹿の乳と云ふものは一寸味ひのあるものであります。角や毛などは細工物に用ひます。けれども大目的は運搬用です。他に移住する時分に、天幕の用材とか家具などを載せて行く。又自分の馬の様に乗る。馴鹿には鞍とか其他のものもあり、又裝飾する事もあります。

それから食物は何う云ふ風であるかと云ふと、食物は主として魚らしい。魚は鱈、鮭の如きものになつて居る。やはり魚を食べて居る民族であります。獸肉と云ふものもあるけれども、獸肉より魚肉の方が多し。生肉を食べる。刺身にして食べるのです。日本人も一體刺身を食ふ民族であつて、他から見ると餘程珍しいのです。刺身の事をツラツカワレ (Turakaware) と申します。オロツコは正しく魚食ひの民族で、穀物と云ふものはなかつた。今でも穀物と云ふものは日本人が行つて與へます。又露西亞人が行つてメリケン粉を得て初めて分つた位であります。彼等は魚の生肉を食べますがまた一年の貯へには乾物にして置くと云ふことをする。尙植物性のもものでは、野苺、野葡萄などを採つて食べる。それから寒氣を凌ぐには海豹の油 (Yeldu) を飲む。又之れを醫油の様にして居る。それから『鹽』はオロツコ語ではタウヌ (Taus) と云つて居りますが、是れが餘程不思議です。蒙古語の方でも『鹽』のことをタブ

ソ (Tabso) と云つて居る。鹽と云ふ言葉が蒙古語であると云ふことは餘程不思議であります。そして彼等が鹽を用ひると云ふことは、私の考では元はなかつたものであらうと思ふ。漁りの場合に取つた魚は生で喰ひます。又干肉も其儘の干味ホシヅメを以てし、時として獸油をかけて居ります。どうも鹽はなかつたものであらうと思ふのであります。是れは他の樺太のオソソリチーも爾う疑つて居りますが、私は現今歩いて見て、又言語の上から考へて、どうもさう云ふ感が起るのであります。

次に家屋は何うであるかと云ふと極く簡單であります。(寫眞供覽)。三角形の天幕で、元は鮭の皮を張つて居つたが、今では布が張つてある。オロツコの言葉でアウシダツ (Aundava) と云ふ。もう一つはカウラ (Kaura) と申しまして、樺を張つて作る、是等は共に中央に圍爐裏があつて、圍爐裏の周圍には魚を乾す處が出来て居る。それであるから形がいつも一定して居る。さうして家屋と云つても全く假小屋です。御承知の如く、北の民族は穴居するであらうと云ひますけれども、穴居するのと天幕生活するのと兩つあります。オロツコなどは天幕生活の方です。さうして附近には倉もある。日本の古代の校倉アゼクラの様なものです。奈良の正倉院や春日神社にある校倉アゼクラに似て居る。それに魚などを貯へてある。それから熊祭の熊を容れて置く所もある。それから家の内の神様に幣ハタテを奉る風がある。是れは餘程御注意を願ひたいのは、北海道のアイヌの言葉でイナオ (Inao) と云ふが、ギリヤーク語ではナオ (Naio) と云ふ、オロツコの方ではイルラヲ (Ilrao) と云ふ。斯う云ふ幣ハタテは滿洲から掛けて西伯利亞のツングースにまで行

はれて居る。蒙古人も幣を用ひて居ります。さうすると却つて亞細亞大陸の言葉をアイヌが借用して居るのかも知れぬ。ギリヤークはナオと云ひ、オロツコはイルラヲと云ふ。日本でもイナオと云ふ處がある。即ちどちらが根源であるか分らない。それと共に飾つた具合も餘程似て居る。丁度注連ツルナの様にしてやつて居るし幣束の様にもして居る。それであるからオロツコの小屋を遠くから見ると白い幣の立つて居る處が面白く見えます。幣束は北海道アイヌの用ひる其より大きい。

それから頭髮はどんな風をして居るかと云ふと、小供は額の上のみ髪をのこし、他は剃つて居る、この事をムンニュー (Mungyu) と申します、それから男は現今散髪であるけれども、昔は矢張り頭上で二つに分けて後は辮髪に下げて居つたらしい。女は今まで餘程昔の風が遺つて居りまして、極く幼い者は娘分になると總髪にして背ろを辮髪にして垂れる、之をボタンイ (Panggi-yi) と申ますさうして夫を有てば角髪 (Paolia) を結ぶ。これは間宮氏の本にも書いてありますが、今でも女は角髪の形の髪を結つて居ります。この髪カミの結び方は上は二つに分け、左右の耳の所で互に束ねて居ります。耳には男女共に輪を掛く。男の輪は小さいが女は非常に大きな輪を掛けて居ります。鼻には女は輪を入れて居る。それから衣服は何うであるかと云ふと、男は今では洋服を着て居りますが、女も露西亞の風をして居るのである。昔は彼等は魚皮で衣服を作つて居つて、其仕立方は長い筒袖であつて殆ど上衣は踵まで達する。さうして袴ハカマの處と裾には模様がある。足にはバッチを穿いて、バッチの上から又皮製の半バッチをはい

て居る。

次には宗教のことを申します。宗教はギリシヤ教を信じて居るけれども、元はシャマンを信じて居つたのであります。シャマンは男のシャマン (Fushe-shaman) と女のシャマン (Apuhi-shaman) とある。彼等は、人間が病氣 (Dumw) になるのは或る靈魂が體に這入るからだと思つて居る。世の中の人が死ぬば皆アンバ (Amba) となる。アンバに善 (Olinga) と悪 (Olli) と兩つある。其悪の方が體に這入ると病氣になる。シャマンは要するに其悪のアンバを取去る仕事をするものである。

シャマンが死せば、又後の者がシャマンになる、シャマンになる時には精神状態が一變し『シャマンする Ambankeni』になる、この時は狂氣の如くなるのである。シャマンは品行を正しくせねばならぬ、彼等にして酒を飲み、且つ其他惡事をすることは出来ぬ、かくせば Amba は出て行くのであります。今も申しました如く、人の病氣となるのは悪しきアンバが腹の内に這入るから出来るので、シャマンは之れを外に出さしめる役であるが、よきシャマンなれば一寸云つてもアンバは出て行くが、悪しきシャマンは出す事は出来ません。

シャマンがアンバを出すには、祈禱 (Shaman yeyeni) をする、祈禱の際にはシャマンは頭にアイヌのサバウンベの様な木を削つて花にしたイルラヲ (I-lao) をかむり、兩腕にも又これと同じ削り掛を附け、腰には皮の腰巻 (Yupye huss) をつけ、其上から腰鈴 (色々の物を附けて居る) をつけ、左の手には

太鼓 (Darti) を持ち、右手にはムチ (Ghinda) を持つて其太鼓をうち舞踊するのである、其際腰の鈴は動き一種の音を發するのである、かくして内部の悲しきアンバを外に出さしむ、この時犬を殺し、其血 (Uting) で病人をぬる事があります。

シヤマンには祈禱がすめば、病家は御禮として、鍋一個、又は馴鹿一頭か、犬一疋を以つてする。

オロツコの中にはドロヤナギ、ト、マツ、シンコ等で彫刻した人形 (Pom) がある、之は人、獸、魚等があつて、人病めば、之れを火上にあぶり直すのである。又人の來るか來ないかを知る爲めに、人形の頸の邊にトツカリの皮紐を附け、之れを火上にてふる、若し人が來るならばセウは堅になり、來ないならば横にふれる。要するに横にふるれば悪しく、堅にふるれば善しい。

オロツコの宗教は純然たるシヤマン教であつて、西比利亞、滿洲等の其れと全く同一であります。

それからオロツコにも熊祭があります。熊祭のことをオロツコの言葉でブユンフンリヤチニ (Bryunin furiyachini) と云ひますが熊祭と云ふことは決してアイヌばかりでなく、オロツコもやるし、ギリヤークもやる。それであるから熊祭の風習は『幣束ヌツに於けるが如くに極東比亞細亞に廣く行はれて居る所の風俗であると言つて宜いのであります。そこでアイヌの熊祭が本であるか何うか分りません。オロツコの熊祭のことをお話致しますと、最初熊の子を小さい時から熊を養ふて置く圍ひの中に入れて養つて置いて、其儀式の當日其處から熊を引出して參ります。この場所は村落に一ヶ所あります。當日は他の村か

らも大勢人が來ます。其時には決して女は此處に來ることが出來ない。即ち罰が當る。罰が當ることを、オロツコの言葉でウンヌウリ(Dhnuwuri)と云ふ。さうして熊祭を致して、殺した其熊の頭は矢張り幣束の尖に突刺して外に立て、置いて神様に供ふ。この幣束の事を『熊の幣束 Bayun iho』と申す。さうして死んだ熊のアンバが冥途(Buni)に行くと云つて居る。オロツコは一般に人が死んだならば其アンバは冥途へ行くと信じて居ります。この冥途には善きアンバと悪きアンバがあると云つて居ります。熊のアンバも此處へ行くのです。

次にオロツコの方で最も注意すべきことは彫刻であります。木の彫刻です。それから衣服其他のものに刺繡アイをすると云ふことが非常に妙を得て居る。一體アイヌを初めギリヤーク、オロツコをはじめ黒龍江附近のツングーズ民族一般には彫刻や縫取には一種面白い模様が行はれる。是れは時間がないから今日は申し上げませぬが、一種の面白い技術を有つて居ります。

先づオロツコ族と云ふのは大體此の如き状態に在るのであります。欽明天皇五年十二月に『越の國言さく、佐渡の島御名部の碓岸ササキ(佐渡國羽茂郡)に肅慎シウヘンの人有りて、一の船舶に乗りて淹留トモドる、春夏、捕魚ヌホドリして食に充つ云々』これは明かにオロツコの如き魚漁で生活をして居る有様が見えます。更に、齊明天皇四年には『此歲、越の國守、阿部引田の臣比羅夫、肅慎を討ち生熊ヒクマ二つ熊皮七十枚を獻る』とあり、又同五年春正月には、『或本云、阿部引田の臣比羅夫、肅慎と戰て歸り、虜四十九人を獻す』この本文に『是月(正

月)阿部臣(關名)を遣はして、船師フナイクサ一百八十艘を率ゐて、蝦夷國を討たしむ、阿部臣、飽田アキタ、淳代スシロ、二郡の蝦夷二百四十一人、其虜三十一人、津輕郡の蝦夷一百十二人、其虜四人、膽振イブリ鉏の蝦夷二十人を一所に簡ミダび集めて大に饗アして祿を賜ふ、即ち船一隻と五色の綵帛シラキモとを以て、彼の地の神を祭り、肉入籠に至る、時に問ト菟の蝦夷、膽鹿島イカシマ、菟穂名ウホナの二人進みて曰く、後方羊蹄シラベシを以て政所と爲す可しと膽鹿島が語に隨ひて、遂に郡領を置きて歸り、道奥ミチノクと越コシの國司とに位各々二階、郡領と主政とに各々一階を授く」とあります。この條の飽田アキタ、淳代スシロ、津輕等の蝦夷の居る附近に肅慎人が來て居つた事は以上の事實で考へられます。

同六年三月には「阿部臣アベノオサ(關名)を遣はして、船師フナイクサ二百艘を率ゐて、肅慎國を討たしむ、阿部臣、陸奥の蝦夷を以て、己が船に乘らしめ、大河の側に到る、是に渡島の蝦夷一千餘、海の畔ホトリに屯聚イイみ、河に向て營イホリす、營中の二人進みて急に叫ニホカびて曰く、肅慎の船師多に來りて、將に我等を殺さむとす。故に河を濟りて仕官ツカヘマツらむと願ふと、阿部臣、船を遣りて兩箇の蝦夷を喚至て、賊の隱カクるゝ所と、其船數とを問ふ、兩箇の蝦夷便ち隱るゝ所を指て曰く、船二十餘艘ありと、即ち使を遣して喚ぶ、而れども肯て來らず、阿部臣、乃綵帛シラノキモ、兵ツカヘモノ、鐵テリガネ等を海の畔ホトリに積みて貪嗜ホシせしむ、肅慎、乃ち船師を陳ツラね、羽を木に繫カけて擧げて旗と爲し、棹トを齊トへて近づき來て、淺處アサキに停トマり、一船の裏より二の老翁ウチを出して廻り行かしめて、熟ら積める綵帛等の物を視て便ち單衫ヒトヘギスを換著て各々布一端を提げて船に乘りて還り去る、俄シバシバして老

翁更た來たり換たる衫を脱ぎ置き、并びに提りたる布を置き船に乗りて退く、阿部臣、數船を遣りて喚ばしむれども來ることを肯せず、弊路辨島に復りぬ、食頃ありて和せんと乞ふ、遂に肯聽ずに己が柵に據りて戰ふ、時に能登臣、馬身龍敵の爲めに殺されぬ、猶ほ戰ひて倦ざる間に賊の爲めに己が妻子を殺さる』とあります、この大河は石狩川か、然らざれば樺太のボロナイ河でありまじやう。石狩川と見た方がよろしい様です。而して互にかく入合て品物を交易する風はアイヌの傳説にあるコロボツグルの話の交易の仕方とよく似て居ります。同年夏五月には『…又石上の池の邊に須彌山を作る、高さ廟塔如り、以て肅慎の四十七人を饗す』とあり、更に養老(元正天皇)四年四月(續日本紀)には『渡島の津輕の司、從七位上諸君鞍男等六人を靺鞨國に遣はし其風俗を觀せしむ』とあります。養老四年(750年)唐玄宗開元八年)當時の靺鞨は如何と云ふにすでに渤海となつて居つた時で、即ち養老四年から二十二年前に其祚榮は立つて震國王となつて居る、これは支那の唐の中宗聖曆二年(689)文武天皇三年である。けれども彼が唐に朝貢したのは、唐の睿宗の先天二年(開元元年高王十五年)日本の和銅六年西暦735年)であるから日本の靺鞨を見に行たのは支那に通してから八年目である。日本の使が行てから八年目(神龜四年)に渤海の船が出羽に漂着し、其翌年即ち五年には渤海の使が始めて來朝した。さうすると兎に角肅慎靺鞨は蝦夷に近い所に居つた事が知れます。

以上の肅慎人は(Orko)である、さうすると彼等ツングースは黒龍江の河口附近からウスリ河を通じ

て朝鮮の北部に及んで居つた（野人）さうすると沿海州から樺太の中央より南部に來り能登呂岬から北海の西海岸に來て居つたものであらう。

以上に因て見ますと、此等は私はオロツコに餘程關係があると思ふ。それでありますから、蝦夷即ち今日のアイヌが日本人に追はれて北海道から樺太へ行かない前には、樺太の中央部から掛けて其南部はオロツコの屬地であつたらうと思ふ。其時分には樺太の南部は北海道と往來が出來たと思ふ。それで齊明天皇の時に蝦夷等が肅慎人が來て困ると云つたのは何うも此消息を示したものでらしい。即ちオロツコは樺太から南下して北海道に來り、又アイヌは日本人に追はれて次第次第に樺太に北上し、遂にオロツコ、アイヌが互に衝突したのであつて、それが現今彼等二族が樺太島に見る地理學的分布の状態になつて居るのでありまじやう。彼のシュレンク氏は樺太島の北にギリヤークが居り南にアイヌが居るのは是れ『アイヌは日本人に追はれて北の方に行かうとし、ギリヤークは大陸でツングース等に逐はれ南に行かうとして、さうして樺太でアイヌの北遷とギリヤークの南遷との關係上衝突して居る状態が現今見える』と云つて居りますが、何故に氏はオロツコを挾まなかつたかと云ふ疑があります。ギリヤークの方はアイヌと衝突せずして來て居るのではないか。この事實は『日本紀』はよく其消息を語つて居るものであります。さう考へまして、我が奈良朝の初頃に於ける人種の分布から言へば、オロツコの系統は沿海州の沿海に總て居つて、それから樺太の中央部から南、時々北海道の本土或は淳代、飽田、越國

の邊<sup>アタリ</sup>までも侵して居つたのではないかと思ふ。今此文献を見ますと即ちオロツコの研究と云ふものは種々の關係に於て餘程面白いであらうと思ふのであります。今日は是れだけの事で御免を蒙りたいと思ひます。

(尙本論文の讀者は口繪第二を参照ありたし)



蓋交神之道在誠、至誠以祭祀、  
則鬼神之幽冥、亦可格思矣、茲  
爾黎民至誠以求之、則無不感。

（山鹿素行）